

そのまま男の両足がふわりと浮き上がり、彼の中で、世界がぐるりと回転した。

次の瞬間、背中：いや、体全体に衝撃が走る。全身に何か走り回っているような痺れを覚えたとおもうと、それは徐々に痛みが変わって全身を蝕んでいった。

「おお：こうなるのか：ちよつと感動だな」

苦しむだけの男と比べ、寧ろ投げ飛ばしたフィーロの方が驚いた顔をしていた。組織内の日本人に教えて貰った技だったが、上手く投げる事ができたのは初めてだった。

「グア：：：あああ：：：」

短いうめきをあげる仲間を見て、残った二人のチンピラが息を呑んでいる。4人がかりでくれば良かったものを、相手を舐めていたのか、いまだに老人の横につっ立っている。

このガキはヤバイ。リーダーは目の前の少年の実力に気がつき始めた。

もう片方の男は既にナイフを取り出しており、指し示すような形で刃先をフィーロの方へと向けていた。

「：：：あー、抜きやがったな：：：」

困ったような表情を作りながらも、フィーロは内面では余裕だった。

フィーロは自然な動きで男達との間を詰めると、両手をあげながら口を開く。

「おいおい：：こんなケンカに得物を出すことは無いだろう？」

「うるせえ！ 今更下手に：：：」

言いかけたところで、男のナイフを持つ手に衝撃が走った。ファイロがつま先で的確に蹴り上げたのだ。思わずナイフを落としてしまう。地面に小さく跳ねた金属を、ファイロの足が遠くへ蹴飛ばしてしまった。

「あ……」

男の目が、ついナイフを追ってしまふ。

その視界の下方から、何かが迫って来た。

それがファイロの拳だと気付いた時には既に遅く、鼻の下あたりに強い衝撃を受けると共に、腹に蹴りを食らって地面に転がされてしまふ。

「で、どうする？」

リーダーの方に向き直って尋ねる。リーダーは、相変わらず懐に手を入れたままだ。

「これからは、ままごととは学校でやれよ」

先刻の侮辱をそのまま返す。リーダーは聞いているのかいないのか、最初にファイロの胸倉を掴んだ男の方に歩いて行く。男は立ち上がったが、まだ苦しそうに喉をさすっていた。二言三言何か会話をすると、それぞれ倒れている男達の方に向けより、肩を貸しながら引き起こす。

男達は最後にファイロを憎々しげに睨みつけると、逃げるようにその場を去って行ってしまった。